タタラ場があった更なる痕跡

戸谷　克己　著　（飯能市房ヶ谷戸）

上赤工の畑ヶ中にある「古歌」の扁額と赤沢の星の宮神社に
ある妻沢の人達が奉納した鍛冶の場面が描かれた巨大な
絵馬とはこの地にタタラ場が存在した確実な証拠である

前々号で、私は「赤工」「金山」「聖天淵」という地名と、「金山」の地にある叶神社とその神社に祀ってある鉄製と木造の二体の歓喜天の像から、この「金山」という場所に、かつてタタラ場があり、製鉄に携わる人達が集団で生活していた場所であると推定したが、その後、そのことを更に証明することになる新たな資料を発見したので、ここに紹介したいと思う。そのことは前々号の記事を書いた時に、すでに知っていた事柄であったのだが、そのことをもう少し詳細に検討する必要があって、今回の紹介に相なったのである。

それは上赤工にある小さな祠の石の地蔵の後ろにある板の扁額に墨で綴られていた「古歌」と題された「朝日はやく　夕日をうける鹿ノケ入　大判小判で千万両」という言葉であった。この言葉の原型は、「朝日さす　夕日輝く」＋「地名」という和歌の形で、古代から金属の採掘や加工にあたった技術者が、鉱山や金属製錬の場所を示すために記した、暗号のような符丁の言葉であった。
やはり、この「古歌」の原型は、『人間郡史』によると「朝日さす夕陽輝くかのがへの　よつどめの木に黄金千枚」という和歌で、元は明治5、6年頃に焼失した上赤工の畑ケ中にあった東演寺の地蔵堂の扉に刻まれていた和歌であったと言う。
この和歌を、地元の古老が、焼失後かなり時間が経過してから思い出して、自己の記憶を頼りに「この地蔵さまにはこんな歌が伝えられているが、世の中から忘れられないために」と、額に書いて奉納したとのことだが、記憶が曖昧であったために、額に刻まれた「古歌」は、元の和歌とはかなり違ったものになってしまったとのことである。それに、地蔵もまた、この地蔵ではなかったとのことであった。（飯能市原市場在住の郷土史家、故・西村一男氏の『ふるさと漫録』による。）

古歌の綴りでは、「かのがへ」が「鹿ノケ入」になってしまっているが、私の解釈では「へ」は「戸」のことであり、「かのがへ」は「金山」にあ

る神社を「叶(かのう)神社」と呼んだように、「金山」が訛った「叶(かの)ケ戸(へ)」のことであり、まさに金山の集落のことを示しているのであろう。この和歌が扉に刻まれてあったという地蔵堂の名栗川を挟んだ対岸に、丁度「金山」という地名を持つ集落があり、「古歌」においては「戸」の訓読みの「へ」を「入」と多分間違ったのであろうが、その元の地蔵堂は、まさに「金山」の集落の入り口の所にあったのである。この「金山」の地のある場所は、四方を山で囲まれているが、丁度東と西に位置する場所が鞍部になっており、「古歌」のごとく「朝日」が「早く」射し「夕日」を遅くまで「うける」場所であり、まさに「朝日さす　夕陽輝く」という意味にぴったりと符号する場所なのであった。

また、「よつどめの木」とは、日の当たる山林や崖縁に自生する落葉灌木の「ガマズミ」の木のことである。

この「ガマズミ」の木は、古来より、幹や枝は折れにくいために、鍛冶屋や石工の使う玄翁＝鉄製の大きな鎚の柄等に用いられて来たのであり、まさに「黄金千枚」を生み出す道具の材料であった。それに、古歌の「千万両」の「両」は江戸時代のお金の単位であり、本歌の「黄金千枚」の方が、それより古い時代を意味し、ここにタタラ場があった時代を正確に表している。

この「古歌」の記された扁額もまた、かつて、この「金山」の地に、タタラ場があり、当時のこの近辺に住んでいた関東武士団の武具を製作するために、盛んに製鉄や精錬がなされていたという事実を確実に物語っている、確かな証拠の一つとして掲げること出来るであろう。それは、「赤工」や「金山」や「聖天淵」といった地名と、鉄と木造の歓喜天の像の存在に、タタラ場があったという確かな意味を言葉として示す存在となっている。

そのことを更に裏付ける事実として、この「金山」の地から入間(名栗)川沿いに二キロ程遡った所にある「赤沢」という集落の星宮に奉納されている絵馬を挙げたいと思う。この絵馬には、緋の袴をはき長い黒髪を振り乱して大鎚を振り下ろそうとする女性と、烏帽子を被り片手で金鋏で刀身を挟み、もう一方の片手でその刀身を鍛えようと小鎚を振り上げる男性の姿が描かれている。

そして、この男性の片方の眼は潰れている形で描かれている。この男性と女性は、鍛冶の神の金山彦と金山姫のことを描いたものであろう。金山彦の神の別名は、『日本書紀』に出てくる「天目一箇(アメノマヒトツ)神」で、まさに一つ目であり、鍛冶に携わる職人は製鉄の過程で火を見詰めなければならないために、否応なしに目を痛めることになってしまう。

そのことは、神楽に出てくる「ヒョトコ(火男)に共通のことであり、「ヒョトコ」は片目が潰れて口を尖らしており、それと対の「オカメ」

のカメは溶鉱炉を意味する甕のことで、「オカメ」は「オタフク」とも称されるが、それは「ヒョトコ」が口を尖らしているのが溶鉱炉に風を送り込んでいる姿を表しているのと同じように、「フク」が風を吹く(送る)フイゴ＝タタラを意味しており、まさに「ヒョトコ」と「オカメ(オタフク)」とは、鍛冶の神の金山彦と金山姫のことを戯画化して表しているのである。それに一般的には、タタラ場は女人禁制となっているが、女性を排除するようになったのは、江戸時代になって支配の論理として男尊女卑を原則にした儒教というものを価値化するようになったためであり、元々は絵馬に描かれているように、また神楽で演じられているように、男女が共々、一緒に労働に勤しむ姿が一般的であった。

星宮神社は明治になって天皇制を強化するために起こった廃仏毀釈の運動の時期迄は、妙見大菩薩を祀った妙見寺というお寺であったのだが、妙見とは北極星のことであり、鉱山や精錬に関わりの深い修験道の山伏が信仰する神仏混清の神であった。この星宮神社の絵馬はその描かれた内容から見て、まさにこの「赤沢」＝「金山」周辺にタタラ場があり、そこで盛んに製鉄が行われていたという事実を雄弁に物語っている。　（戸谷）